

## 知多半島の巡礼文化と知多四国霊場

山口 由等（愛媛大学社会共創学部教授）

### The Pilgrimage Culture of Chita Peninsula and the Shikoku Pilgrimage Route in Chita

**Professor, Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University  
Yoshito YAMAGUCHI**

Around the Chita peninsula that stretches along the southern part of Nagoya city in Aichi prefecture there are many temples as well as numerous banners, path markers and posters demonstrating that the pilgrimage culture has been passed on. There are many cases where one temple is a sacred site for many pilgrimages. In fact, some are related to four pilgrimage routes.

The most popular Chita Shikoku pilgrimage lies along the coast on the east-western side of Chita peninsula and the temples at the tip of the peninsula have a very strong connection with the sea. For example, at the reef of Ooi in Minami Chita-cho said to be where Kōbō Daishi/Kūkai landed, there is a stone statue of Kōbō Daishi. As well, there are sacred sites on the small islands of Himakajima and Shinoshima offshore from the tip of the peninsula, and traveling by boat from the shore to the islands was part of the pilgrimage.

One large factor that supported the Chita Shikoku pilgrimage was the pilgrimage confraternities in various places in the Chubu area, but presently participation in events and tours by local bus companies and Nagoya railways has been increasing. From 1910 to 1920s people were making the pilgrimage by car and taxi and after World War II most made the pilgrimage by bus. With each generation, the way of the making the pilgrimage changed.

Pilgrims believed that the Shikoku pilgrimage was the "head pilgrimage" so those who acted as leaders for pilgrimage organizations needed to have experience with the Shikoku pilgrimage. On the other hand, while one worshipped at the main hall and Daishi hall along the Shikoku pilgrimage, only the Daishi hall is visited at temples along the Chita Shikoku pilgrimage route and there are cases where the *fudasho* (temple) was expressed with the word, Kōbō. This was especially so along south Chita where Kōbō Daishi visited and it is recommended that people visit the temples related to such legends. Among the many small-sized pilgrimage routes located on peninsulas in various places, for example, the thirty-three sacred sites of Southern Chita, the twenty-five sacred sites of Honen in Chita, and the thirty-three sacred sites of Chita Saigoku, the replica pilgrimage routes of the Shikoku pilgrimage played a role in making pilgrimages related to the faith in Kōbō Daishi.

#### はじめに

愛知県名古屋市の南側に伸びる知多半島は、現在では西岸中部の常滑沖合に建設された中部国際空港によって名古屋への国際的な玄関口となっているが、江戸時代から商業・海運や醸造業、漁業などで栄えた地域で寺院も多く、多数の幟や道標、ポスターが各地の札所や行路でみられるなど巡礼文化が根付いている地域である。（写真1）なかでも知多四国霊場は、小豆島（香川県）、篠栗（福岡県）と並んで三大新四国霊場と呼ばれており、さらに現在の名古屋地方では鉄道資本系の旅行会社のツアーとその宣伝によっておなじみである。知多四国霊場は、「三大開山」とされる亮山和尚・岡戸半蔵・武田安兵衛達の十数年にわたる努力で1824年に整備され、本四国と同様の88カ寺に加えて開山所3カ寺、番外7カ寺があり、合計98カ所を巡る。しかし、知多半島で現在も活動しているとみられる巡礼は、この他にも知多西国33所霊場、法然上人知多25霊場、南知多33観音霊場などがあり、さらに小規模な巡礼も各地で多数行われている。（写真

2) 一つの寺院が複数の霊場の札所を兼ねていることも多く、中には4つの霊場の札所となっているところもある。(写真3) 知多半島には多様な巡礼文化が根付いており、とくに中部地方最大の都市圏である名古屋地方の人びとにとっては身近な巡礼・観光の地となっている。知多半島の観光のメインである海水浴でも、模倣地名の海水浴場がいくつかみられるのも、様々な写し霊場の伝統を考えると興味深い事実である<sup>1</sup>。本稿では、四国遍路の写し霊場である知多四国霊場を中心として、知多半島の多様な巡礼がどのようにして受け継がれているのかを明らかにしたい。

## 1 知多半島の産業の歴史

### (1) 産業

知多半島は江戸時代には尾張藩領に属したが、当時は海運が交通の中心であることから、西岸の諸港は伊勢湾対岸の諸地域、東岸は渥美湾を挟んだ三河と、それぞれ深い関係を持っていた。また、江戸幕府の開祖・徳川家康の母親である於大の方が阿久比（現・知多郡阿久比町）の久松家と再婚し、その子である家康の異父弟の家系が松平氏を名乗って松山・今治および桑名の3つの親藩を成した。このように、知多地方は初代将軍・家康の生母と縁のある地であり、さらに徳川御三家筆頭の尾張藩領ということも相まって、徳川将軍による幕藩体制の下では政治・社会的に特別な地位を持っていた地域である。一方、経済・交通の面では、もともとは平野が少なく用水も不足しており農業には向かない地域であった。しかし、京都・大阪・江戸のいわゆる三都経済が発達すると、畿内と江戸を結ぶ海運の中間に位置する内海だったことから、中継寄港地ないしは潮待ちの地として海運の要衝となつた。また、江戸時代後半に三河木綿や知多酒などの産業が盛んになると、江戸に向けた出荷量も増大して、ますます産業と海運業が発展した。尾張藩が諸税を免除・軽減したことによって、知多半島の商品生産と交易が盛んとなり、領民は豊かとなつていった。この時期には新田の開発も盛んになり、廻船業・肥料商など地元の商人や名古屋商人による埋立・新田開発が増加し、近代の地主制の発達に繋がつていった。

近代に入ってからも産業の発展は続き、とくに醸造業では、江戸時代以来の関東向けの酒造業は停滞したものの、地元や名古屋都市圏向けの各地の醤油・味噌・溜製造がおこなわれた他、半田の中埜酢店（ミツカン）やカブトビール（現在のサッポロビールに合併）、ケチャップ・ソース製造業のカゴメなどの全国的な食料品メーカーが誕生した。また、「知多晒」として知られる東京市場向けの織物業、常滑の陶器・タイル製造業なども発展し、昭和初期までは軽工業を中心に様々な近代産業が展開していった。日露戦争（1904-05年）後の知多地方は国内で最も力織機化の進んだ地域となり、知多晒木綿は日露戦後恐慌からの回復に続いてその後も産額を急増させていった。流通を支える交通においても、海運と鉄道の両面で近代化が進んだ。明治前期に鉄道用の土管製造を中心に発展した常滑焼では、電話用器、電話用地中管、電気用栓円瓶など電化に関する製品もあった。こうした建設や電化に関係した製品の市場は、都市の発展によって急速に拡大していったから、需要の拡大を見込める有望な商品であった。したがって、主な販路は近隣の美濃・伊勢以外では六大都市（東京・大阪・名古屋・京都・横浜・神戸）全てにわたつていた。その他、海外では北米・清国に加えて、膠州湾、釜山、仁川など日本の支配地域で、鉄道・築港用の土管が新たな販路として加わり、とくに朝鮮向けが増加していった。

### (2) 流通と地域の盛衰

近代では吃水の深い蒸気船が海運の中心となつたため、深い入り江を持つ武豊港が「天然の良港」として注目され、知多商業会議所は名古屋との間を結ぶ知多半島横断運河工事を建議し、武豊港は愛知県で最も早く海外貿易港としての指定を受けた。その後、名古屋近郊の熱田湊で大がかりな築港事業が始まり（=現在の名古屋港）、武豊港では築港・修港も行われないままであったが、日露戦争後に知多半島の産業が発展すると共に、東海道線敷設の建設用資材を武豊港を経由して運搬するために武豊線（武豊-熱田）が先行して敷設されると、主に大豆や豆粕、および石油などの輸入額が増加し、1911年には関税額が全国6位という国内有数の輸入港となつた。また、鉄道などで使われる国産の石炭も当初は武豊港経由で名古屋に運ばれた。ただし、武豊諸港の主な貿易港は短期間に変化し、開港当初に武豊村、2年後には亀崎町に置かれていた大阪税關武豊税關支署は、1911年には肥料等の輸入の中心である半田港近くの成岩町に移転し、武豊には出張所・派出所が置かれた。一方、旅客鉄道では熱田神宮前を起点とする愛知電気鉄道が1913年に知多半島方面の路線を開業し、昭和に入って名古屋鉄道知多線が敷設された。こうした国鉄・私鉄の整備は、

人口増加する名古屋市の郊外、ないしは名古屋都市圏にとっての観光・行楽地としての性格を知多半島に与えることになった。

明治期の知多半島では、取引所設立などを巡って競合した半田と亀崎が、どちらも海運、肥料取引、醸造業などを発展させつつ主導権争いを繰り広げ、県内の産業流通の一つの核を作り上げていた。そうした中で、日露戦後の不況期に知多地方で最大級の商店が破綻するという大きな事件があり、さらに、地元資産家が設立した紡績会社やビール会社が大企業に系列化されるなど、地方経済の再編と新しい成長に向かた動きが始まる。とくに亀崎では関係する有力事業家が相次いで没落し、1910年代に入ると亀崎町の人口も停滞した<sup>2</sup>。これに対して、半田町では人口が急増し、知多半島の中心地としての地位を確立した。輸入大豆を用いた肥料の製造販売を行っていた半田の萬三商店は生産量を拡大させ、とくに長野県の販路開拓に成功したことで国内最大の肥料商へと成長した<sup>3</sup>。一方、南知多では漁業と水産加工が主な産業であったが、大正期から昭和初期にかけては海水浴や海岸の景勝地など観光地化が進み、巡礼もその一端を担つて多数の小規模な宿泊業もみられるようになった。

以上の様に、江戸時代後期から近代にかけての知多半島における産業・流通業の発展は富の蓄積をもたらした。そのことが、寺院数の増加や寄進等による各寺の施設の充実に繋がり、知多四国霊場の整備をはじめとする巡礼を支える背景となつたと考えられるのである。

## 2 知多四国霊場の特色と歴史

### (1) 概要と特色

知多四国霊場は、88カ所の札所を開山寺・番外を加えた98カ所が、南北約100kmの知多半島の東西の海岸沿いに点在し、徒歩で一度に巡礼するなら200km弱を1週間程度かかる行程となる。(写真4)開創当初の名称は准四国霊場だったが、1893年に知多新四国霊場と改められて、この頃から巡礼者も増加した。その名称が、さらに知多四国霊場となったのは、1983年のことである。

大師堂と本堂の両方を参拝する本四国(四国遍路)と異なり、知多四国霊場は大師堂のみを参詣する<sup>4</sup>。こうした巡礼のあり方が、1800年代の開創時からもともとそうであったのか、あるいはその後に変化した結果なのかは不明だが、本四国以上に知多四国霊場は弘法大師信仰の巡礼に特化しているといえよう。地元住民の巡礼者の呼称も本四国の「お遍路さん」に対して知多四国では「弘法さん」である。知多半島における弘法大師信仰は知多四国霊場その他の巡礼とも大きな関わりがあるが、生前の弘法大師の足跡の伝承によても行われている。814年に三河から海を渡ってきた弘法大師が、知多半島南端に近い東岸の大井港・聖ヶ崎で上陸し、半島を西に横断して内海で護摩修法などを行った後、陸路で伊勢へ向かったというものである。かつて弘法大師空海が上陸したと伝えられる大井(南知多町)の岩礁には、上陸する姿の弘法大師の石像が建つ。(写真5)また、四国別格20霊場・第4番の鯖大師本坊と同様の、弘法大師が漁師に鯖を請うて断られたという内容の伝承による鯖弘法大師霊場が半島南端沖の日間賀島にある。弘法大師の足跡の伝承の舞台となっていることもあってか、南知多では弘法大師信仰が目立ち、札所の意味で「第〇〇番弘法」と表記している霊場もみられる。さらに、最も知名度の高い知多四国霊場とは別に、大正期に整備された四国直伝弘法88カ所霊場など弘法大師に特化した別の巡礼が複数あり、知多半島の弘法大師信仰は相当の広がりがある。

弘法大師信仰においてもみられるように、海との係わりは現代の知多四国霊場のもう一つの特色であり、とくに南知多地域では目立つ。例えば、半島先端の沖合の小島である日間賀島(ひまかじま)・篠島(しのしま)にも合わせて3カ所の札所があり、船に乗って海を渡ることが巡礼に組み込まれている。半島の南半分はそもそも平地がほとんどなく岩礁や入り江が迫る集落が多い。また、産業も漁業や水産加工業、海水浴場を始めとする観光業など海との係わりが深い。とくに漁業は、遭難の危険性がある一方で豊漁への願いがあり、一般に信仰に結びつく側面があると考えられ、知多地方で巡礼が盛んな要因の一つといえよう。

### (2) 歴史

1800年代初頭の知多四国霊場の整備の経緯は、公式には以下の様にまとめられている。1809年に妙楽寺(真言宗)・亮山阿闍梨(1772-1847)の夢に弘法大師空海が現れ、知多で霊場開創を進めよとのお告げがあった。これにより霊場の開創を発願した亮山は、三度にわたって四国88所霊場を巡りながら、知多の各寺で遍路先の土砂を分けたり弘法大師像を納めるなどしたが、札所の整備はなかなか進まない

かつた。1819年に半蔵行者、1823年に武田安兵衛行者が加わり、さらに数人の僧侶・庄屋等の協力によって、足かけ16年の歳月を経てようやく全ての札所の整備が完了したのは、1824のことであった。知多四国霊場では亮山和尚・半蔵行者・安兵衛行者の3名が「三開山」と位置付けられている。札所整備が完了した翌年の1825年には知多准四国と三十三所観音の「道中記」(里程表)が木版刷りで出版された<sup>5</sup>。

発願者である亮山は犬山藩出身で名古屋で修業し、妙楽寺住職を34年間務めて引退後は福生寺で余生を過ごした。引退後も海上安全のための灯明台を建てたり、河川改修・埋め立てを計画するなど、現代風にいえば地域社会の改善に晩年まで取り組んだ。四国遍路を行ったのは妙楽寺の住職となって3年後に弘法大師の夢告を受けた直後からで、その年と1812年、1818年と合計三度にわたって四国88所霊場を巡り、妙楽寺には亮山の四国遍路の装束、納経帳、納め札、収集した掛け軸などが多く残されている。続いて岡田半蔵行者(1752-1824)は、知多半島の福住の農民で、亮山より20歳年長であり、知多四国霊場完成の年に死去している。岡田半蔵が1816年に建立した大乗妙典66部供養塔が誓海寺に残されており、66部巡礼の一部として四国遍路の経験も含まれるはずであり、全国を巡礼した先達だった。66部供養塔建立の3年後の1819年に亮山と出会って霊場整備事業に協力し、財産を処分して資金を提供しており、その貢献は大きかったとみられる<sup>6</sup>。最後に武田安兵衛(1778-1826)は、四国讃岐国出身で1820年から四国遍路など全国遍歴に出て、その途中で知多半島の巡礼も行った。知多四国霊場の完成した1824年に再び知多半島に来て札所制定に協力したとされ、知多に止まつたままその2年後に布土・十王堂で死去した。半蔵行者に比べると全国遍歴・巡礼および開創準備への協力の期間は僅かであるが、弘法大師と同じ出身地ということで尊重されたのかもしれない。

以上の様に、三開山それぞれの霊場整備への係わりはかなり異なるが、本四国88カ所霊場の経験が尊重されていたことが窺える。2人の行者が具体的にどのような活動をして、他の協力者と比べてどの程度の功績があったのかについては、あまり説明されることはないが、いずれも僧侶ではなく全国巡礼の経験者だったことと、霊場開創と同時期にこの世を去ったことが共通している。霊場整備に殉じたとみなされて、追悼されたというような意味があったのかもしれない。

残されている納経帳は両親菩提のためのものであるが、亮山の四国遍路巡礼は写し霊場整備のために、知多での札所に埋める土砂を持ち帰ることが目的であったと考えられる。各札所の大師堂が開創時から整備されていたかどうかは不明だが、参拝対象となる大師像をそろえるだけでなく写し霊場としての正統性の確保のために土砂(お砂)が必要であり、本四国での巡礼に関わる遺物が大事に保存されるなど、四国遍路を巡礼の本家として重視する意識が強く窺えよう。開創時から明治初期にかけての名称は「准」四国であり、本四国に准じるという正統性はとくに本場の土砂が中心と思われる。また、本四国の巡礼経験者の係わりを強調するのも正統性を補強する側面があるといえよう。現代でも、第51番札所・野間大坊(美浜)では境内に四国の札所で集めた土砂を並べて埋めた、本四国の「お砂踏み」を常設していて、こうした観念を確認することができる。(写真6) また、巡礼講などでも四国88カ所霊場を本場と見做しているといわれ<sup>7</sup>、札所の寺院に四国巡礼の結願の奉納額が掲げられているところもある。

明治維新の神仏分離政策は仏教および寺院にとって大きな危機であり、全国と同様に知多半島でも寺院の荒廃がみられた。いくつかの札所で廃寺や統合がみられ、その前後で札所の移動が行われた<sup>8</sup>。1893年に知多新四国霊場と改められるが、その後の日清戦争の頃から巡礼者も増加した。新四国の名称は90年間続き、今でも札所を巡ると石碑や道標、奉納品などに新四国の時期の物が多くみられる。その後も日露戦争や太平洋戦争などの戦争のたびに従軍者のための巡礼が増加し、1908年からは「新四国新聞」が発行されるようになった<sup>9</sup>。また、巡礼者の増加を受けて1909年には愛知県知多郡新四国連合寺院会が結成された。明治後期以降の知多新四国霊場時代の巡拝者の増加には、いくつかの巡礼講が大きく貢献したとされている。知多新四国霊場会1978には、毎春2千人の信徒を巡拝させていた福寿講、大正期にバス巡礼の先駆ともいえる10台の馬車による巡礼を行った新栄講などが紹介されている<sup>10</sup>。また、1956年のバス巡礼で確認できる講・団体の数は約700にのぼり、とくに団体を前提としたバス巡礼は巡礼講と関係が深かったとみられる。平成の調査では巡礼講の数は66へと激減している。数が減った反面で、観光目的は後退して信仰・御利益を目的とした集まりといった側面が強まっていた様である<sup>11</sup>。

有力な団体による寄進や講指導者の立像・記念碑、奉納された記念写真などは、現在でも各札所に数多く

残されている。（写真7）これらによっても、こうした巡礼講が近代の知多四国霊場を支え、巡礼の中心となってきたことが窺われる。札所の遺物に記された諸団体の名称や所在地の記載は名古屋が目立ち、人口や経済力を背景に有力な団体は名古屋に多かったと考えられるが、三河、岐阜の団体も確認でき、中距離にある地域にも熱心な団体やその指導者がいたことが分かる。

大正期（1912～26年）に入ると、1914年頃から自転車による2泊3日程度の巡拝が始まり、昭和初期には全盛期となって徒歩まいりと並存する時代が続いた。一方、タクシーやバスによる巡拝はすでに昭和初年には開始していたが、流行するのは戦後の高度成長期以降のことである。1956年の調査では、おそらくチャーターによる巡礼講によるバスだけで、年間に730台が運行されていた<sup>12</sup>。各講の地域別内訳は、名古屋133台（18%）、その他の尾張地方241台（33%）、三河101台（14%）で愛知県では合計475台（65%）である。さらに岐阜県も239台（33%）とかなりの割合を占め、その他に静岡県、三重県などが合わせて16台（2%）であった。さらにその後、高度成長期後半に知多半島の道路整備が進んだことからバスに加えてタクシー巡拝が増えていった。1978年には開創170周年記念事業が行われ、その記念として『知多新四国誌』が刊行され、各寺院に残された遺産や史料の確認が行われ、同書に写真が掲載されている<sup>13</sup>。

### 3. 現代の知多半島と巡礼

#### （1）現代の巡礼

知多半島には知多四国霊場の他にも多くの巡礼・霊場巡りがあることは、しばしば指摘されている。例えば、2007年の『朝日新聞』は、「四国直伝弘法大師」、「知多本四国」、「知多四国33観音霊場」、「知多奉安21カ所」などがあり、かつては知多半島から静岡県境まで「海岸弘法88カ所巡り」があったことがわかった、と報じている<sup>14</sup>。また、半島北部の大府市の郷土史では、市内の霊場巡りとして上記「四国直伝弘法大師」の他、「知多四国33所観音」、「愛知梅花33所観音」、「尾張33所観音」、「知多板東33観音霊場」、「知多100観音」、「御母公21所」、「法然上人知多25霊場」、「知多半島くるま6地蔵」、「尾州大府市内24寺」の10件が挙げられている<sup>15</sup>。ただし、これらの中で知多四国霊場の知名度は飛び抜けており、愛知県内でも知多半島の巡礼といえば知多四国霊場だけだと思われているのが一般的な様である。

1990年代末頃の知多四国霊場の状況は、当時の新聞記事で確認できる。知多四国霊場会事務局長によると、1960年ごろの最盛期には巡礼者は10万人といわれていたが、この時期には約7万人に減少していた。また、余暇の浸透や健康ブームの延長で取り組む参拝者が多くなっており、軽装の巡拝者が定着したが、何回も回る人が増えているとも報じられている。この頃はまだ、立春を過ぎたころのシーズンに巡礼者が多くなると新聞で報じられていたが、かつては人気を集めた観光バスによる団体旅行から、自家用車の普及で個人的な小旅行に替わり、宿泊せず次の休日に途中から再スタートする人が多くなり、季節も春だけではなくなってきていた。春のシーズンには毎週火～木曜の三日間の巡礼バスが運行されていたが、こちらも巡礼者はいったん家に戻って翌日にスタートし直すスタイルであった。参拝の仕方も、お堂の前でお経を唱える人ばかりではなくており、手をあわせるだけ、おさい錢だけという巡礼者も現れ、納経帳に朱印する人は4分の1程度に過ぎなかった。軽装が主流になったのは1990年代に入ってからといわれ、ある巡礼ツアーでは白装束ではなく普段着に数珠だけ、参加者の8割はシャツなどの上から白装束を羽織るスタイルで、残り2割は白っぽいTシャツやポロシャツを来て歩いていた。また、足袋で歩いている人は数えるほどで、ほとんどの人がウォーキングシューズで参加していた。その他にも、自動販売機やコンビニエンスストアを利用する巡拝者の姿が現代的な巡拝を感じさせたという。企業の新人研修が利用することもあるが、若い人たちは御朱印をスタンプラーと捉えているようだという<sup>16</sup>。さらに数年経った2000年代初頭には、3～4月に1日1000人を超える巡礼者が訪れており、自家用車で巡る個人のほか、貸切バスによる団体客、ジャンボタクシーを使うグループが主流になっていた。また、近くまで電車で来てウォーキングを楽しむ人も増え、「お参り兼用のレジャー」化が進んだとされている<sup>17</sup>。

現在の知多四国霊場の巡礼の、軽装による車の移動でも、気軽に何度も参加している人が多いとされる<sup>18</sup>。旅行会社や交通会社による複数回に分けられた巡拝バスツアーが定着し、地元の知多乗合（株）、名鉄知多タクシー、県外の岐阜羽島観光バスなどが巡拝バス・タクシーを運行し、WEBのホームページや駅頭のチラシ・ポスターによって宣伝していることが実地調査で確認できる。本家の四国遍路で歩き遍路がある程

度復活してきているのと同様に、知多四国霊場でも、人びとの健康志向によって歩いて巡礼する人が増えている<sup>19</sup>。2008年に200周年記念行事として実施された「歩いて巡礼」には4000人近い参加者があり、師崎街道に列をなし、その7、8割は女性だったということである<sup>20</sup>。また、北半分を中心に半島内の路線網をかなり整備している名古屋鉄道が、年間でスケジュールを組んで鉄道・バスと徒步を組み合わせた「歩いて巡拝（まいる）」を企画・宣伝しており、巡礼講などに所属しない一般の人びとはこちらを利用することが多いくなっていると考えられる。通勤・通学客が多数通行する、名古屋市内の各駅にチラシを置くことで、人口の集中する名古屋から個人や少人数で観光中心の巡礼を行う層を掘り起こしているのであろう。

## （2）知多四国霊場のマーケティング

知多四国霊場会も、巡礼者が減り気味となっていた2000年頃から振興策を検討し始め、継続的に記念事業の実施や関連書籍の刊行を続けており、また新聞社や出版社による案内所や道中記も多く出版されている。1999年には、知多四国霊場会は全11回の徒步巡拝を主催した他、「かうばう（弘法）道」などと刻まれた道標を地図に落とし込んで歴史の道を探る作業に取り組んだ。また、「知多四国88カ所巡りのお坊さんたち」（知多四国霊場会の寺院の僧侶と推測される）が名古屋・金山総合駅（JRと名鉄のターミナル駅）でチラシや地図の配布などのPR活動を行ったことも報じられている<sup>21</sup>。とくに2008年の開創200年には、様々な企画が行われた。10月の「開白（かいびやく）法要」（武豊町民開館）から開幕し、キャラクター作成、「霊場サミット」、仏教音楽と現代音楽のジョイントコンサート（半田市）などが計画された。これらのさまざまなイベントは、知多四国霊場の人気を盛り上げる一因になったと評価されている。2008年8月には、小豆島、篠栗を始めとして全国18霊場の関係者が集まった「霊場サミット」が開かれたほか、日本三大新西国霊場の「お砂踏み」が中部国際空港で行われ、初日だけで約4000人が詰め掛けた。また、「寺側の視点ではなく巡礼者の視点から歴史をひもと」き、多くの写真を掲載した『保存版 知多巡礼紀行』の刊行や、DVD「しあわせ知多半島 ぐるりお遍路の旅」の製作も行われている<sup>22</sup>。三大新西国霊場のお砂踏みは、2018年9月に知多四国開創210年記念事業として名古屋駅の名鉄百貨店でも実施された。（写真8）210周年の期間中には特製経本進呈や記念宝印授与が行われたが、「お砂踏み」以外の記念行事は、2017年11月の「開白法要」から始まり、2018年3月「慶賛大法要」、4月「三開山報恩法要」、2019年2月に予定（本稿執筆時）されている「結願・結縁大護摩祈祷」などで、仏教儀式が中心となっている。

以上の様に、現代の知多半島に仏教信仰一般や弘法大師信仰の施設や組織が残り、信仰の儀式・表現として巡礼の文化も現代的に変化しながら続いている。中部地方の中心である名古屋都市圏に近いことや気候・風景の良さが娛樂的な要素を持っていることもあるが、その中で知多四国霊場がとくに多くの巡礼者を集めているのは、開創時に長い年月をかけて正統性を確保し、霊場会が周期的に活発な活動を行ってきたことが、持続的な巡礼を促してきたためと考えられる。一方で、巡礼する側をみると、信仰性の強い巡礼講が支えた最盛期から、近年は個人・グループによる娛樂的な巡礼へと変化している。交通会社・旅行会社など企業活動の役割が大きくなっており、とくに開創200周年が転機となった交通機関と徒步を組み合わせた巡礼が、今後の方向性であるといえよう。

## 4 おわりに

各地の写し霊場や新西国はもともと観光的側面が強く、その分、消滅や衰退したところも多いといわれる<sup>23</sup>。そうした中で、知多四国霊場が代表的な新西国となり、また、多くの巡礼が混在する知多半島で飛び抜けた数の巡拝者を確保できているのは、第2章で確認した様に、単に巡礼先の寺院を設定するだけでなく、創始者達の巡拝経験や「お砂」収集などによって、全国的な知名度と権威を持つ本四国との繋がりによる正統性を確保し、さらに弘法大師像や大師堂を整備することで信仰や御利益への期待にアピールしてきたためと考えられる。こうした信仰的な巡拝は人びとの信仰心の低下した現代では衰退せざるを得ず、他方で交通の発達によって身近となった本四国と直接比較される現在の状況では、逆により気軽な方向へ向かうのが合理的であろう。草創期に形成された本四国との関係性や、長年にわたって代表的な巡礼と位置づけられた歴史を背景に、より大衆化しつつ、鉄道会社などによって観光的巡礼とし維持されているのが、現代の知多四国霊場といえよう。一方、現代では日帰りがほとんどで明治・大正期のような巡礼者の宿泊需要は無くなってしまい、地方創生の視点でみた場合の単独の経済効果は必ずしも大きくないが、巡礼と海産物や海水浴との相乗

効果が総合的な地域のコンテンツとして意味を持っているといえよう。

※本稿の一部に、日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「大正・昭和期における住宅関連産業の展開と「暮らし」の変容に関する総合的研究」（研究課題番号：17H02552、研究代表者：中西聰）による成果を利用した。

#### 参考文献・資料

- 浦長瀬隆 2008 『近代知多綿織物業の発展』（勁草書房）
- 小河功 2015 「観光地における虚構性の研究」（滋賀大学経済学会『彦根論叢』405）
- 知多新四国靈場会 1978 『知多新四国靈場』（知多新四国靈場会）
- 知多新四国靈場会監修 2009 『保存版 知多巡礼紀行』（樹林舎）
- 中日新聞出版部 2008 『ぶらっと遍路知多四国』（中日新聞社）
- 中西聰・井奥成彦編著 2015 『近代日本の実業家 萬三商店小栗家と地域の工業化』（日本経済評論社）
- 廣江安彦 2014 『わが街辞典 おおぶの歴史文化』（大府市）
- 松田雅子 2005 「本四国靈場に対する新四国靈場の模倣携帯と実際—知多四国靈場をフィールドとして—」（名古屋大学人文科学研究会『名古屋大学人文科学研究』34、名古屋大学大学院文学研究科）
- 糸山智美 1999 「近代における知多新四国巡 礼の盛況」（日本福祉大学知多半島総合研究所『知多半島の歴史と現在』10）
- 山口由等 2014 「地方実業家の不動産所有と経営：愛知県半田地方・小栗三郎家の事例」（愛媛経済学会『愛媛経済論集』34(2)）
- 山口由等 2015 「20世紀初頭の名古屋の流通基盤整備と都心化」（愛媛経済学会『愛媛経済論集』35(1)）
- 山口由等 2016 「20世紀初頭の愛知県経済の発展：後発工業地帯のキャッチアップと経済圏形成」（愛媛経済学会『愛媛経済論集』36(1)）

#### 註

- 1 小河 2015、82–83 頁。
- 2 中西・井奥 2015、423–429 頁。
- 3 中西・井奥 2015、311–338 頁。
- 4 松田 2005、76 頁。
- 5 知多新四国靈場会 1978、9–10 頁。
- 6 知多新四国靈場会 1978、14–17 頁。
- 7 松田 2005、79–80 頁。
- 8 糸山 1999、153–154 頁。
- 9 知多新四国靈場会 1978、44 頁。
- 10 知多新四国靈場会 1978、45 頁。
- 11 松田 2005、71–73 頁。
- 12 知多新四国靈場会 1978、21–38 頁。
- 13 知多新四国靈場会 1978、5–17 頁。
- 14 『朝日新聞』2007年1月14日。
- 15 廣江 2014、46 頁。
- 16 『朝日新聞』1998年2月10日・5月12日、1999年9月23日、2000年3月16日。
- 17 『朝日新聞』2002年4月2日、2003年2月25日。
- 18 『朝日新聞』2015年9月21日。
- 19 『朝日新聞』2009年2月15日。
- 20 『朝日新聞』2008年6月18日。
- 21 『朝日新聞』1999年9月23日、2000年3月16日、2001年10月12日。
- 22 『朝日新聞』2007年10月11日、2009年7月15日、『読売』新聞2009年2月15日。
- 23 糸山 1999、138 頁



写真1：半田図書館に展示されている道標



写真2：篠島の「島弘法巡り」の祠



写真3：野間大坊（美浜町）  
4つの巡礼の札所であることを示す掲示

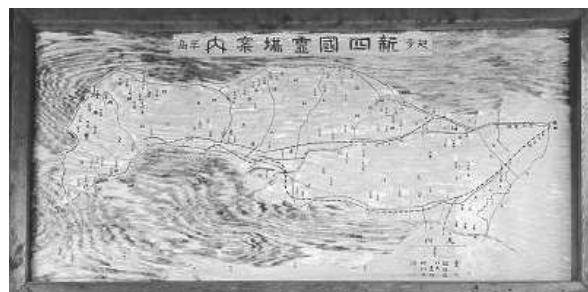


写真4：新四国霊場案内  
(安楽寺、阿久比町)



写真5：聖ヶ崎の上陸大師



写真6：野間大坊の四国88所霊場のお砂



写真7：札所に掲げられた巡礼講の奉納品



写真8：名鉄百貨店本店で行われたお砂踏み  
(名古屋市、2018年9月)